戦後、新興の足袋商店も多数生まれ、「孝子蔵」、「小沼家の石蔵」など足袋蔵も再び建設されるようになりました。また、大正時代に足袋産業から派生した被服産業も台頭し、「舞原蔵」などの倉庫を建設しています。その後、昭和 29 年ナイロン靴下が発明されると、た行田の足袋産業は服装の洋装化とあいまって、翌年から足袋の需要は急速に落ち込んでゆきました。行田の足袋業界は被服、靴下、ヘップサンダル、地下足袋など各種繊維産業へと転換していきました。服装の洋装化の進行によって、その後も足袋の需要は減少を続けました。

足袋産業の衰退とともに足袋蔵の建設は昭和 32 年で途切れ、商品倉庫としての役割も終えて遊休化して行きました。その一方で、『十万石行田本店店舗』のように建物のもつ歴史的風格を商業活動に生かした店舗も現れ、昭和 50 年代には、足袋蔵の再活用が議論されるようになりました。